

水と文学

(1)



前東京都水道局理事 小泉 智和

「全管連ジャーナル」から、何か一息つく話を載せてもらえないかとの依頼をいただきました。

この7月に、30余年間勤めた東京都水道局を退職し、時間的余裕ができたこと、また、自書「玉川上水ぶらり散歩」で文学者を何人か掲載したこともあり、機会があれば「水と文学」といったようなものを書いてみようかと思っていました。そんな折でのお話であったので、遠慮なく引き受けさせていただくことにしました。

本の紹介ではなく、小説に書かれた水の話、その時代的背景や作者の水への思い等を紹介し、ついでに小説の舞台となった街等を歩いてみようと思っています。

第1回は、夏目漱石の「門」です。

●漱石の足跡

漱石は、明治元年の前年、慶応3年(1867)に東京牛込の馬場下(堀部安兵

衛が立ち飲のみをしたとされる酒屋裏)で、名主夏目小兵衛直克の5男3女の末っ子として生まれました。本名は、夏目金之助です。

維新の変革で、夏目家は没落したため、漱石は2歳の時、新宿大宗寺裏の名主塩原家に養子に出され9歳までここで過ごします。養父母が離縁したため、夏目家に戻され、後、一高、東大を卒業しました。

明治28年松山中学校に英語教師として赴任、翌29年熊本第五高等学校に転任、同33年から36年まで英国に留学します。

帰国後、本郷千駄木に居を構え、第一高等学校教授及び東京帝国大学講師となりました。明治大学の教壇にも立っていますが、この頃、漱石はノイローゼ気味で「やめたきは教師、やりたきは創作」と、高浜虚子宛に手紙を書いています。明治38年、この時書かれたのが、「我輩は猫である」で、彼の最初の小説です。千駄木の『猫の家』は現在犬山市の「明治村」に移築保存されています。同年大学

を去り、本格的執筆活動に入り、松山時代を題材とした「坊ちゃん」や熊本時代の「草枕」等を発表します。

翌年本郷千駄木から西片町に転居、40年朝日新聞社に入社し職業作家となり、生まれ育った街に近い早稲田南町に転居します。そして、新聞に「虞美人草」、「三四郎」、「それから」、「門」等を掲載していくこととなります。

漱石の小説は、自身の生活と作品背景とが密接につながっているのが特徴です。



大正元年9月撮影

● 「門」に描かれた明治の水道

「門」は明治43年に朝日新聞に連載されますが、この小説の中で、「御米は台所で、今年も去年の様に水道の栓が氷つてくれなければ助かるがと、暮れから春へ掛けての取越苦勞をした。」と記しています。

主人公である宗助と御米夫婦の家の台所には水道が引かれています。

明治32年に給水を開始した東京水道ですが、当初、水道は水道料金や工事費等が高いので申し込みが少なかったのです。10年を経た明治42年で、水道使用戸数は、東京市総戸数の約5割（給水人口普及率77.3%）でした。しかし、その多くは共用栓（共同水道）で、自宅の台所に蛇口があるのは、比較的裕福な家庭でした。

料金は、共用栓は6戸まで年8円に対して、戸建は1戸5人までが年5円でした。

小説は、更に「水道税の事で一寸聞き合わせる必要が生じたので、宗助は帰り道に坂井へ寄った。」と言ったくだりがあります。

これは、当時、市域拡張・需要増大に対処するため、拡張事業が急務となり、水道税が話題になっていた事によるものです。



蛇体鉄柱式共用栓

●水道工事店の歴史

一寸、話はそれますが、工事店の事にも触れておきましょう。

明治の時代、水道布設の目的は、衛生上の目的、特に悪疫流行（コレラ・筆者注）の予防にあつたため、水道経営には営利を排して公益優先とし、地方公共団体の経営を原則とすることとしました。

これを受け、東京市は、「給水管はすべて水道部において布設するものとす」と規定し、直営施工を原則としていました。

例外として、計量給水の場合（普通の使用は放任給水でした）に限って、メーカーから先の工事は、職工（流末工事店）による民間施工を認めていました。当時、市が行う職工試験の科目は、筆算、鉛管接合及び水栓取り付け方でした。

大正末期から昭和初期にかけて、関東大震災からの復興や市域拡張による水道の普及は著しく、工事店が施工する工事量は次第に増加していきました。

昭和6年、東京市は、「流末工事店」制度を定め、あわせて「責任技術者」の資格を定めました。同14年に「指定水道工事店」制度となりました。

●晩年の漱石

漱石の話に戻しましょう。

漱石は、胃が弱いくせに食い意地が張っていて、脂っこい物が大好きで、夕食はビフテキやすき焼きがありさえすれば上機嫌であったと言います。酒は下戸で、甘い物に目がなく、神経質な事もあり終生胃潰瘍に悩まされます。

「門」を書きおえて直ぐの明治43年6月、胃潰瘍で入院、そして退院後の療養先で大喀血をし、危篤状態に陥りますが、一命を取り止めその後も作品を書き続けます。

大正5年（1916）、49歳で息を引き取りました。この年の結婚式で食べ過ぎた好物の南京豆が潰瘍を悪化させたと言われ、また、贈られた鶏（つぐみ）の粕漬けを骨ごと食べたことが死の誘因になったとも言われています。

墓は、雑司ヶ谷墓地にあり、戒名は、「文獻院古道漱石居士」です。